

日本語教育における中東との連携を目指して — 一私的取り組み —

吉田 昌平

【キーワード】 中東、日本語教育、異文化コミュニケーション

0. はじめに

1970年代にエジプトとサウジアラビアに留学経験のある筆者は、近年、エジプトの日本語教育を通じて再び中東との関わり合いを持ち始めた。エジプトにおける日本語教育の詳細やカイロ大学での授業風景に関しては、関（1980）、ハムザ他（1995）、渡辺（2006）らに譲るとし、本稿では、これまでの個人的活動と今後の計画の概要を報告することとしたい。

1. 中東における日本語教育の重要性と学生交流

首相官邸「文化外交の推進に関する懇談会」報告書（平成17年）は、現代ポップカルチャーを含む文化外交を通じた自国についての理解促進とイメージの向上を文化外交の目的の一つに挙げ、東アジア地域とともに、中東イスラーム地域を文化外交推進の重点地域と定めている。我が国側では、現地の日本国大使館や国際交流基金、国際協力機構（JICA）に代表される公的機関や民間団体等が文化外交を担っているが、中東側ではどうかと言うと十数カ国にある大学等の日本語教育機関が日本文化発信の拠点となっている。中でも、アラブ諸国の盟主であるエジプトのカイロ大学は、1974年に日本語日本文学科が開設されて以来、他の日本語教育機関に教員を派遣する等、日本と中東の交流を担う人材を大勢輩出している。同学科の卒業生である日本研究者によって、日本文学（安岡章太郎、吉本ばなな、別役実らの作品や、百人一首、方丈記等）がアラビア語へ翻訳され広くアラブ諸国の人々の目にふれるようになり、2000年には初めてのアラブ人によるアラブ人のための日本語教科書(ファーリス他 2000)も出版された。ちなみに、2005年には、同学科卒業生が駐日エジプト大使館文化参事官に任命

され、我が国との文化外交を担っている。エジプトではカイロ大学以外にも、アインシャムス大学、ヘルワン大学、セッタ・オクトーバル（10月6日）大学、アレキサンドリア大学、ミスル科学技術大学において日本語コースが開設され、総勢300名近い学生が日本語・日本文学等を学んでいる。

一方、他の中東地域に目を向けると、アラビア半島ではクウェート、バハレーン、アラブ首長国連邦、サウジアラビア、イエメン、大シリア地域ではシリア、ヨルダン、北アフリカではチュニジア、モロッコにも日本語コースが開設されている。我が国は原油輸入の9割近くを中東に依存しているにもかかわらず、中東との交流の絆は比較的浅く、日本語学習者数、教師数、日本語教育機関数では、アジア・大洋州、ヨーロッパ、アメリカ大陸地域の足下にも及ばないのであるが、浅い絆の中で日本語教育が文化交流に果たす役割は極めて大きいと言える。

さらに最近では、中東人の欧米一辺倒の留学指向に微妙な変化が起きている。欧米に留学はしたものの、9.11事件や移民問題から生じたアラブ人に関する負のステレオタイプや差別意識があるホスト国に失望したというものである。テロ容疑でライフラインである銀行口座を封鎖される等、物理的に留学の続行が困難となるケースもある。一方で、「アラブ諸国とはどの国か」と問われた時に非アラブの中東諸国（トルコ、イラン、アフガニスタン等）も挙げてしまう人が多い我が国では、当該地域に関心がないだけに差別意識もなく、中東人にとっては比較的済みやすい場所のようだ。駐日エジプト大使館文化参事官によると、アメリカの大学院に在籍するエジプト人からの日本留学に関する問合せが急増しているという。また、アラブ首長国連邦（UAE）の新聞報道によると、今年アブダビ首長国の皇太子が、将来日本の大学へ進学させるためにと2名の自国子弟を日本人学校付属幼稚園に入園させたという。

このような中東諸国の現状に反して、日本の大学レベルでの人材育成、相互理解に対する取り組みは十分とは言えないのではないだろうか。文部科学省の平成18年統計によると、日本の大学、大学院、短期大学の中東出身の留学生の合計数は605名となっている。他の国々との留学生構成比では0.6%とかなり少ない。一方、次の資料1に見るように、外務省海外在留邦人数統計資料（平成18年度版）によると、留学生・研究者・教師として中東諸国に長期滞在している日本人は合計264名と半分以下となっている。

資料1 中東諸国に長期滞在している留学生・研究者・教師の数264名の内訳
 (外務省、「海外在留邦人数統計 平成18年版」を基に作成)

順位(邦人数)	国名
1位(116)	エジプト・アラブ(共)
2位(71)	トルコ
3位(32)	シリア・アラブ共和国
4位(14)	イラン・イスラム共和国
5位(6)	クウェート国
6位(5)	レバノン共和国
7位(4)	チュニジア共和国 オマーン国
8位(3)	モロッコ王国
9位(2)	アラブ首長国連邦 サウジアラビア ヨルダン・ハシェミット王国 バハレーン王国
10位(1)	イエメン共和国

ただし、邦人0の国を除く

しかも、この数字から研究者と教師の数を引いた留学生の数となると差はさらに大きくなるはずだ。外務省の「国(地域)別総計・邦人上位50位推移」で1位と2位を占めるアメリカ合衆国、中華人民共和国の言語や文化が日本の大学や社会一般でどのように親しまれているかは比べるまでもないことだが、中東諸国の文化に関する正確な情報を得られる機会と場所は、アラビア語講座や中東イスラーム研究講座がある数少ない大学等に限定されている。日本側が中東諸国への留学に積極的になれない主な理由として、中東諸国の政情不安、中東諸国に対する「危険」なイメージの普及、中東諸国への留学が将来留学生にもたらすメリットへの疑問等が考えられる。日本の大学が受け入れる留学生の数と中東諸国へ送り出す日本人学生の数釣り合いがとれないこと、送り出す日本人学生の安全性に関わる問題に

対応しかねること等で日本の大学が交流をためらう気持ちは理解できる。しかし、このためらいは日本側が、中東諸国に関して正確な情報を得ることと相互理解の努力を怠っていることで生じた誤解と言えなくもない。将来、中東諸国と日本が、良きパートナーとしてあらゆる分野で共に発展するためには、日本語教育の分野においても、連携の柱を構築する必要性が出てきている。そのためには、大学間の連携と協働作業を推進し、我が国の公的援助機関対中東の非援助機関に代表される、これまでの日本上位型ではなく、中東諸国に日本が真横につらなる形で並び、絆を深めることが大切であると考えられる。

2. 連携をめざしたこれまでの活動概要

その連携をいかに構築すべきか。政府や公的機関主導のトップ・ダウン型の方法ではこれまでと同じく、日本上位の構造を崩すことは困難であろう。そこで、ボトム・アップの流れを目指し、1970年代より個人的に中東地域と関わりながら築いた人的ネットワークを利用し、2004年より本格的に連携作りの基盤構築を開始した。

活動の第一歩は、将来の連携に共に取り組んでもらえる人材探し、ネットワーク作りであった。2004年からの2年半程の期間で幾人かのキーパーソンと出会うことができネットワーク作りの基盤ができあがった。また、キーパーソンたちを通じて日本語教育に関わる課題もいくつか見えてきた。2004年から2006年現在に至るまでの主な活動の概要は次の通りである。

1) 【2004年4月～9月】国際交流基金の「日本語教育フェローシップ」で中東のA国から渡日した大学教員B氏のアドバイザーを務める。

(活動内容) 招聘された教員と共にA国の学習者を対象とした中級学習者のための読解教材およびDVD副教材の作成を支援する。その際、日本人大学教員C氏にも協力を依頼した。教材完成後に、「A国人と日本人の協働作業における問題点」について双方にインタビューした。以下はそのまとめである。

〈日本人側〉

- ①A国人は、仕事上の計画性に欠け、作業時間がだらだらと続く。
- ②作業の全体像を捉えてから部分を実施するということがない。
- ③Hall (1973)の複次的時間(polychronic time)の特徴そのままである。
- ④協力者に要求が多い。
- ⑤裏表がなくさっぱりとした性格なのでわかりやすい。
- ⑥意見をはっきり言うので話し合いがしやすい。
- ⑦明るい。

〈A国人側〉

- ①日本人は、小さいことにこだわる。
- ②日本社会全般と同じように、機械のように規則に縛られ人間性に欠ける。
- ③集中力がある。食事もとらずに仕事をする。
- ④もう少し、A国の仕事の仕方を知ってほしい。

2) 【2004年7月～9月】カイロ大学日本語日本文学科教員を本学外国人客員研究員として受け入れる。

(活動内容) 日本語とアラビア語の社会言語学の研究を行なった。翌年赴任することになるカイロ大学についていろいろと聞くことができた。

3) 【2004年11月】カイロ大学日本語日本文学科設立30周年記念日本学学会で論文を発表(代理発表)。

(活動内容) 音韻論に関する拙論を発表。但し、授業期間中でエジプトへ渡航ができなかったため、現地の代理人に発表を依頼した。この代理発表のための連絡を通じて、カイロ大学内数名の研究者とのつながりができた。

4) 【2005年2～5月】国際交流基金の日本研究客員教授派遣事業によりカイロ大学文学部客員教授を務める。

(活動内容) 資料2の業務を担当した。

資料2 カイロ大学日本語日本文学科 筆者担当業務内容(2005年2月～5月)

講義名	講義対象者	受講者数	講義時間
言語学	大学院、大学院予備課程	3名	日曜・午前11時～午後2時
文学講読	大学院、大学院予備課程	3名	日曜・午後2時～5時
研究方法	大学院、大学院予備課程	3名	火曜・午後12時～2時
文学講読	学部3年生次	21名	木曜・午前8時～10時
日本語学	学部4年生次	19名	木曜・午前10時～12時

講義名	講義内容
言語学(大学院)	言語学諸分野の概要の説明、及びその簡単な応用
文学講読(大学院)	テレビドラマ「世界の中心で、愛を叫ぶ」(TBSエンタテインメント)全編(523分)の文字おこし原稿の講読及び視聴
研究方法(大学院)	方法論(テーマ決定、資料収集、アウトライン、言語スタイル)及び実際のレポート書きの練習
文学講読(学部)	映画「ピンポン」(アスミック/小学館、114分)の文字おこし原稿の講読及び視聴
日本語学(学部)	現地教員と分担を行い、音声学を担当。

*この他、オフィスアワーを使い大学院生、教員の個人指導を行った。

筆者が横浜国立大学で教えている『国際理解科目(アラブの言語と文化)』では、日本人学生にKJ法を用いて彼らが抱くアラブ・イスラームのイメージを調べさせる活動を行なうことがあるのだが、ネガティブなステレオタイプが多く並ぶ。ステレオタイプ形成の出所を問うと、新聞、テレビ、書籍、映画等だと言う。そこでカイロ大学にいる機会に、日本へ留学した経験のあるエジプト人学生を対象に「日本人が抱くアラブ・イスラームのイメージ」についての活動を行なってみた。結果は資料3の通りであるが、メタ・イメージを正確に言い当てた。日本に留学中のアラブ人留学生は、常に日本人の言動に見え隠れするこれらのイメージとともに生活をしているわけである。逆に日本人学生が、不本意ながらも、ここまで自民族を客

観視できるであろうか。

資料2の講義には日本人留学生やエジプト人助手等も飛び入りで出席し、若手研究者、親日派の学生とのネットワークを作ることができた。

資料3 カイロ大学学生による「日本人のもつイスラームのイメージ」

(原文のまま。註は筆者。)

みかい	<ul style="list-style-type: none"> ● ムスリムはアラブ(註:「遊牧民」)だからラクダや馬に乗る。 ● 普通のスプーンやフォークを知らない。 ● ムスリムは、むちです。 ● ムスリムはやっぱり、さばく。 ● ムスリムは暑いさばくに住み、交通機関はラクダやロバしかない。 ● ムスリムはインターネットやテレビとか知らない無知だ。
やばん	<ul style="list-style-type: none"> ● ムスリムはテロのみなもと ● イスラムは刀によって普及された ● ちょっとした理由のため戦争をおこし、holy war のスローガンをかかげる ● ムスリムはテロ
イスラムのきそく	<ul style="list-style-type: none"> ● おさけとかアルコールを飲まないから、かわいそう ● ムスリムの女性のいしょうはお化けのいしょうみたい ● ムスリムの人には肉があまり食べられないことです(とり肉でもだめと言う感じ) ● ヘガブ(註:スカーフ)をかぶってる女性はこわい ● 厳しい ● 一日で五つ間祈りするのはとても大変です ● イスラム教はきびしい ● イスラム教徒は女性がかならず長くて広い服を着るべきだ。日本人にとって、夏の服すごく大変です ● ムスリムの男は皆こわいひげをしていて、ガラビヤ(註:長衣)をしている
むせきにん	<ul style="list-style-type: none"> ● 約束時間を尊敬していません ● ムスリム人は時間を守りません
けいざい	<ul style="list-style-type: none"> ● ムスリムはやっぱり、生活は楽しくない ● イスラム国々の経済はたくさん問題から悩む ● 苦しい生活を生きます
男尊女卑	<ul style="list-style-type: none"> ● 女性の理由意見は言うことはいけないと考えがあります ● イスラム社会は男尊女卑の社会 ● イスラムは女性をそんけいしてない

5) 【2005年2月～5月】カイロ大学教員による「アラビア語—日本語辞典」の編纂に協力。

(活動内容) 3ヶ月にわたって毎週1回、日本語及び対応するアラビア語のチェックを行った。客員教授として赴任して気づいたことは、現地人教員同士の協力体制があまりみられないことであった。チームティーチングの場合や日本語弁論大会等の行事がある時は勿論協力して行なうのだが、共同研究活動等はみられなかった。このため、カイロ大学のスタッフをまとめるキーパーソンが存在せず、一人ひとりのスタッフとつながりを構築する必要が生じた。この編纂協力のように各大学教員が行っている研究に個別対応することでネットワークの人員を増やすことができた。

6) 【2005年～現在】カイロ大学文学部博士課程連携指導教官。

(活動内容) 他の指導教官と連絡を取り合って指導を行なっている。自分の専門から多少逸脱するような分野であっても自己努力で指導するようにしている。別件でエジプトに派遣される場合以外の旅費や日本から学生のために持っていく文献購入は自費による。この活動の目的は将来を担う人材育成のためである。

7) 【2005年4月】カイロ大学文学部講師と日本語教材 (Yoshida他 2005) を作成し、カイロで出版。

(活動内容) これまでの初級教科書に満足できない学生のための教材をめざして作成した。一般に普及している「動詞のマス形 (丁寧形)」から教える初級教材ではなく、「動詞の活用全体」を最初に教える教材・教具を開発、出版した。出版の副次的産物として、エジプトにおけるエジプト式仕事法を自ら体験することができた。日本や日本語と全く関わりのないグラフィックデザイナーや教具作成を依頼した町工場の職人や中央郵便局の輸出手続き担当職員に接し、彼らの考え方、日本に対する意識を知ることができた。

8) 【2006年3月】エジプト国立アインシャムス大学外国語学部日本語学科で大学院の集中コースを担当。

(活動内容) 修士課程の学生を対象とする音声学の授業を依頼された。ア

インシャムス大学の日本語学科は2000年に開講された。現在同学科で常勤教員として教えているのは7名（内2名は国際交流基金派遣）で全員日本人である。エジプト人は非常勤が2名（共にカイロ大学教員）。そのため、ここでは主として在エジプトの日本人日本語関係者とネットワークを作ることになった。もちろん、カイロ大学と同様、学生とのネットワークを広げることができた。コースは、10日間という短期間に23時間の授業を集約した超集中コースであったが、ほとんどの受講生は落ちこぼれることなく最後まで出席した。

**資料4 アインシャムス大学外国語学部日本語科筆者担当クラススケジュール
(2006年3月)**

月日	曜日	予定	講義時間	時間数	内容
3月4日	土	カイロ到着			
3月5日	日	大学訪問	学部長主催食事会		
3月6日	月	講義	11:00～15:00	4	音声学
3月7日	火	講義	13:00～17:00	4	音声学
3月8日	水	講義	15:00～18:00	3	音声学
3月9日	木	講義	12:00～16:00	4	音声学
3月10日	金	休校日			
3月11日	土	講義	13:00～17:00	4	音声学
3月12日	日	休校日			
3月13日	月	講義	11:00～15:00	4	音声学・総括
3月14日	火	カイロ出発			

9) 【2006年9月】国際交流基金主催「中東日本語教育セミナー」で講師を務める。

(活動内容) 「中東日本語教育セミナー」は、中東各国の大学及びその他の日本語教育機関の教員が一堂に集まるセミナーである。今回は、アラブ首長国連邦、イエメン、クウェート、サウジアラビア、シリア、チュニジア、トルコ、バハレーン、モロッコ、ヨルダン、エジプトの11カ国63名の

参加となった。セミナーは2日間にわたってエジプトのギザ氏で行われた。筆者が担当した音声学および日本語教育ワークショップ以外に、各国の日本語教育事情の報告や研究発表、全体ディスカッション等があった。これらの時間に加えセミナー時間外にも参加者と交流することにより、各国の日本語教育事情に関する情報を得ることができた。また、参加者が日本人と現地人の両方であったため、双方が抱える協働における問題点についても知ることができた。このセミナーは連携のためのネットワークを一挙に広げてくれた。

3. 活動から得た知見

2004年から2006年にかけての活動を通じて、いくつかの知見を得ることができた。それらは、以下のようにまとめることができる。

〈留学に関わる不均衡の問題〉

1) 9.11事件以後に生じたアメリカやヨーロッパにおける反アラブ人感情により、アメリカやヨーロッパへの留学に興味を失い、日本への留学を目指す若者が増えつつある。前述のように、アラブ首長国連邦では、アブダビの皇太子の依頼により日本人学校付属幼稚園に現地人の子供を2人入園させ、将来、日本の高校、大学に進学させる計画がすすめられている。一方、「中東イスラーム地域を文化外交推進の一重点地域と定める」という首相官邸の発表がなされる等、日本側も相互理解の方向へ動き出しているようにみえるが、留学生受け入れに関する具体的な進展はみられない。

2) 「留学希望者は多いが受入れ機関が少ない。協定を結びたくても中東情勢悪化等から難しい」という意見が中東側から寄せられている。情勢が悪化の一途をたどっているイラク、イスラエルによるパレスチナとレバノンへの侵略やアラブ人による抵抗運動に関するマスコミの報道に接し、まるで中東全域がそうであるかのような印象をもつ人がいるのも無理はない。しかし、当たり前のお話であるが、これらは中東のほんの一部の地域にすぎない。エジプトやアラブ首長国連邦やオマーンのように政情が安定している国もある。中東地域をひと括りにして考える傾向には歯止めが必要であ

ろう。

〈中東諸国における日本語教育に関する問題〉

1) 観光ガイド、日本語教師等のプロになった者以外の者は、覚えた日本語を使う機会がないため日本語の維持ができない。日本人留学生の少なさから考えても、日本語を使う機会が少ないことは明らかである。企業で長期滞在している日本人と現地日本語学習者の交流はほとんど行われていない。

2) 夏季休暇が長いため(3ヶ月間)日本語が維持できない。夏季休暇だけでなく、ラマダン月に日本語指導/学習意欲が低下することも指摘されている。現地の文化・教育体制に応じた適切な日本語教育カリキュラムの開発が必要であろう。

3) 日本語教師の資格の問題(日本語教師としての専門知識がない、中・上級の指導ができない。大学院科目を担当できない等)。もともと日本語教育を専門としない教師が多いのは確かである。短期研修を受けて国際交流基金等から派遣され大学で教える教師、研修を受けずに働く現地雇いの教師等である。どちらも数年で人が代わってしまうことも問題となっている。

4) 設備・機材の不備

日本では当たり前のパソコンとコピー機が期待できない。普段日本や先進諸国で教えている教員は、パソコンでつくったハンドアウトをコピー機で複写して使うことに慣れきっているが、パソコンとコピー機がままならないと窮地に追い込まれることになる。筆者はノートパソコン2台(1台は故障時の予備用)とモバイル型プリンターを現地へ持参して対処している。

5) 日本語を生かせる職の不足

日本企業の進出が少ない、あっても現地人を雇用しない、待遇が悪い、日本語を生かせる現地企業が少ない等の理由により、日本語だけが出来ても

なかなか良い仕事はみつからない。カイロ大学日本語学科に入学するためには、高校時の第二外国語（英語、フランス、ドイツ語等）とアラビア語の全国統一試験において上位10位に入っている必要があるが、このような優秀な人材のうち日本関係の職に就ける者はごくわずかである。中東のD国の大学では、卒業しても日本語関係の仕事があまりないため、日本語学科の入学者が減り学科閉鎖の危機にさらされている。また、ジェトロのホームページにあるアラブ首長国連邦に関する統計資料（2005年5月）を見ると、日系企業進出状況は175社となっているが、にも関わらず日本語を習得して卒業した大学生の就職先にはなっていないようだ。これについては現状を把握する必要性がある。

6) 観光業務に必要な日本語の速習教材の必要性

『みんなの日本語初級』（スリーエーネットワーク）を使用している機関が圧倒的に多い。しかし、指導項目の数が多いこと、語彙等が現地に合っていない等、教材として適当でないという意見が中東日本語教育セミナーでも出されていた。ただし、教材を新たに作るという意見を表明したのは主として日本人であった。アラブ人側からは、日本人主導ではなく教材を作りたいという意見が出ていた。

7) 工学等他の専門の学生が日本で学位を修得する機会の必要

日本で、日本語・日本文学以外の学位を取得する動きが出てきている。問題は、工学部等の学生は忙しく日本語を習得する時間がとれないことであるようだ。これに対してもカリキュラムの開発が急がれる。

8) 裕福な国では、学習者は仕事のためではなく趣味で日本語を勉強している。こういった学生のニーズに答える教師や教材がない（subcultureを扱った教材等）。これまで、発展途上国を対象としていた中東イスラーム地域の日本語教育であったが、近年、富裕なイスラーム国家には先進国の学生と同じタイプの学生が出てきている。日本語習得までにはいたらないかもしれないが、相互理解と平和のために是非、短期留学プログラムの推進とカリキュラムや教材を開発したいと考えている。

〈国・組織間の問題〉

1) 協力体制が未構築。カイロで開かれた中東日本語教育セミナーでも、それぞれの国が現状と問題点を訴えるのだが、共通問題に対しても中東人同士が共同で取り組もうという動きはみられなかった。自分の国以外の国には関心が薄いように思えた。これは、中東各国で日本語教育に携わっている日本人も同様であった。さらに、1国の日本人とアラブ人が協力して教材を作り発表したのはシリアのダマスカス大学日本研究センターのみであった。同じ現場を担当していてもなかなか共同作業は難しいようである。現地人研究者が育ちつつある中東の日本語教育が日本による「援助」の時代から日本との「連携」の時代へと移行しつつある今、協力体制の構築は最重要課題である。

2) 派遣されている日本人スタッフと現地人スタッフの意志疎通が円滑でない場合が多い。現地の教育に関して知識が十分でない日本人スタッフと彼らに適切なアドバイスができない現地人スタッフの双方に問題があるように思われる。派遣される日本人にだけ研修を行うのではなく、受け入れる側にも研修が必要と思われる。

上に挙げた〈留学に関わる不均衡の問題〉、〈中東諸国における日本語教育に関する問題〉、〈国・組織間の問題〉は、日本を含めた横の連携を構築することでかなりの程度解決できるものと思われる。例えば、連携のキーパーソンを要として相互理解の促進と大学間の提携のありかたを再検討することで〈留学に関わる不均衡の問題〉はある程度解消できるであろう。大学間の協定が進めば、〈中東諸国における日本語教育に関する問題〉にあるような教師の質を向上させるためのプロジェクトをつくることも可能になる。例えば、専門知識のある教師確保の一方法として、日本語教育を専門とする大学院生が行う実習の一部（しあげ）を中東諸国の大学および日本語教育機関で行えば、短期間ではあるが、日本で短期研修を受け派遣された教師よりも専門知識のある教師を得ることができる。さらに、日本人実習生は中東諸国の教育制度と文化を理解した上で教える姿勢を学ぶことになるであろう。また、定期的な留学生のやりとりは、現地の大学が

日本語チューターを一定数確保し学生の言語維持に役に立つことにつながるであろう。さらに、双方の大学における日本語教育に携わる教師や学生の連携により、新たな教材も作成可能となる。もし、双方の大学で自国の教育制度と相手国の教育制度を学びあう機会を作れば、現地の日本人教師受入れ機関は適切なアドバイスが可能となり、日本人教師側もアドバイスに即時に対応することができる。これにより〈国・組織間の問題〉で提示された2)の「意志疎通」の問題はかなり解消されるはずである。どのケースを見ても、横つながりの連携の実現がすべての基礎となっていることがわかる。

4. 今後の課題と計画

2004年から2006年にわたる活動の概要とそこから得たさまざまな情報を基に取り組みべき問題を検討してきたが、今後の取り組むべき課題がいくつか見えてきた。

- 1) これまでと同様にネットワークを広げる個人的な活動を続ける。
これまで作り上げてきたネットワークをさらに広げるために、中東イスラーム地域の大学での講義や大学院生の指導を続けていくのはもちろんだが、これ以外でも例えば、民間機関で日本語を教えている現地スタッフや日本人スタッフとの交流も考えている。また、オマーンのスルタン・カーブース大学のように、これから日本語コースの開設を計画している大学にもネットワークを広げるつもりでいる。
- 2) 既に構築したネットワークを使って連携実現のための機会を作る。
連携の機会を作るためには、中東各国にいるキーパーソンが一堂に会する必要がある。これには少なからぬ予算が必要となる。その予算確保のために中東諸国のキーパーソンたちと共にプロジェクトをいくつか立ち上げた。現在、一般公募をしている学術事業への応募を展開中である。
- 3) 横浜国立大学の交流協定校を中東につくる。
現在、カイロ大学との協定を検討中である。

4) 中東イスラーム地域理解促進のための活動。

横浜国立大学留学生センターの同僚たちと共に、長年にわたって国内の各地域で活動する日本語ボランティアの入門講座、ブラッシュ・アップ講座の講師を行ってきた。また、公開講座も主催してきた。これらの活動の延長線上で、中東イスラーム地域に関する「国際理解講座」を開催することができたらと考えている。

参考文献

シハーブ,ファーリス、阿部俊之、ハリール,カラム (2000) 『アラブ人のための日本語』 Cairo: Al-Ahram Press

関正昭 (1980) 「エジプトの日本語教育」 『日本語教育』 通信41 日本語教育学会p140-148

ハムザ,イサム、虎尾憲史; 花田久美子 (1995) 「エジプトにおける日本語教育」 『世界の日本語教育 日本語教育事情報告編』 第2巻、国際交流基金p119-128

渡辺淳一 (2006) 「カイロからクアラルンプールまで—イスラム圏の大学で教えて—」 椎名和男編『海外で日本語を教える □ネイティブ日本語教師への期待』 凡人社 p99-118

Hall, E. T. (1973). *The Silent Language*. Anchor Books.

Yoshida, S., Y. Odagiri, Adel Amin (2005) *A Workbook for Japanese Verbs*. Cairo: Alam el-Kotob